

あかあまん

プランニング・デザイン・総合印刷・オンデマンドデジタル印刷・可変データ印刷
大判ポスター出力・データベース・PDF高速データ変換・CD-ROM制作
3D・CGアニメーション企画・制作



半田中央印刷株式会社

〒475-0032 半田市潮干町1番地の21
TEL <0569> 29-2525 (代) FAX <0569> 29-4500
E-mail: main@handa-cp.co.jp http://www.handa-cp.co.jp

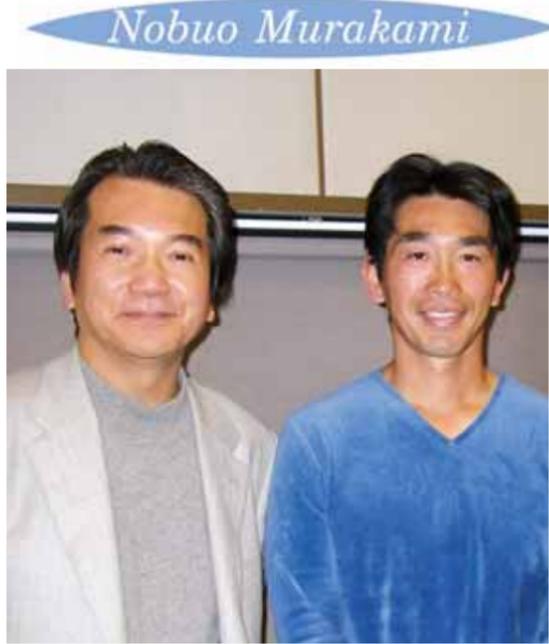
わが町、わが店、この道一筋。出逢いとコミュニケーション あかい新聞店ホームページ http://www.akai-shinbunten.net <発行所>あかい新聞店 武豊店/知多郡武豊町字金下37番地 ☎<0569>72-0356 常滑店/常滑市市場町4丁目167番地 ☎<0569>35-2861 企画・制作：株式会社新聞ビル

元氣のでてくることばたち

152

村上信夫

(アナウンサー)



を継げる嬉しさもあった。就任直後は、清宮さんと、ことごとく比較され、批判もされた。あるべき論に引張られていたら切りがない。引力は責任を取って「いい」と、世論に振り回されな

リーダーだけで解決策を求めてきた組織論には限界がある。これからは、自律したフォロワーが求められる。若者は、機会を与え、環境を整え、立場を用意すれば、挑戦や失敗の繰り返しの中で、劇的に成長する。学生の主体性を尊重し、ともに考え、ともに戦うチーム作りを目指した。監督、コーチ、部員が対等に議論する関係は、オーラがないから

■村上信夫プロフィール
NHK エグゼクティブアナウンサー
1953年、京都生まれ。明治学院大学卒業後、1977年、NHK入局。富山、山口、名古屋、東京、大阪に勤務。現在は、『ラジオビタミン』担当。(ラジオ第一 8:30~11:50) これまで、『おはよう日本』『ニュース7』『育児カレンダー』などを担当。教育や育児に関する問題に関心を持ち続け、横浜市で父親たちの社会活動グループ『おやじの腕まくり』を結成。趣味は、将棋。著書に『元氣のでてくることばたち!』(近代文芸社) 『おやじの腕まくり』(JULA出版局) 『いのちの対話(共著)』(集英社) 『いのちとユーモア(共著)』(集英社)

決断に良し悪しはない

中竹竜二さん

グラウンドで繰り返されるスクラム、タックル、トライ…。選手たちの一挙手一投足に、歓声があがる。中でも、えんじと黒のジャージは、絶大な人気チームだ。創部93年の由緒あるチーム、早稲田大学ラグビー部。東西対抗と大学選手権の大学タイトル24、関東大学対抗優勝34回、日本選手権優勝4回を誇る名門チームだ。そのチームを、カリスマと言われた清宮克幸監督から引継ぎ、独特の選手育成法で、見事なチーム作りをしたのが前監督の中竹竜二さんである。中竹さんは、去年3月まで4年間、早稲田の監督を務め、現在は、日本ラグビーフットボール協会のコーチングディレクターという立場である。

カリスマの後任リーダー

それにしても、5年前、突然、早稲田の監督を要請されたときは、カリスマ清宮さんの後任が務まるのかと、本人が一番驚いた。清宮監督は、トップダウンで、強烈なリーダーシップを発揮した。およそ10年優勝から遠ざかり、低迷していたラグビー部を再建し、5年間で大学選手権3回優勝、2回準優勝に導いた。その清宮さんの推挙なら、「男として受けざるを得ない」。サラリーマンをやめて引き受けた。「勝つて当然」というプレッシャーもあったが、偉大な人の後

選手たちは、清宮さんのような魔法の言葉で待っていた。それがないとわかると、信頼されていない空気が伝わった。「日本一オーラのない監督」を自認した。細身でなで肩だから、存在感がなく、威圧感もない。声に迫力がない。口調も視線も柔らかい。表情もどこか自信がなさそう。すべて清宮さんと対照的だった。「期待にこたえない。他人に期待しない。怒るより謝る」これが中竹スタイルだ。そうすれば、感情のコントロールが出来て、イライラもしなくてすむ。

オーラのないリーダー

中竹さんの独特の育成法は、自らのリーダーシップを発揮するのではなく、選手が練習や試合での課題を自分で考えていく方法だ。それを「フォロワーシップ」という。リーダーをフォロワーする人間が確立されていけば、組織はしっかりする。



俳画/イネ・セイミ

た。彼は、噂や推論で判断していた。見てもらっていないと訴えた彼の練習や試合を、きちんと見ていたことを具体的に説明した。彼は、泣き出した。男らしくない態度は許せないと指摘した上で、いろんな話をじっくりして、誤解は解けた。

「何が出来る？」と聞いたら、彼は「部員の誤解を解く」と自分から言った。想像通り、これ以降、チームの雰囲気は改善された。2007年度、2008年度の大学選手権連覇を達成した。

昔から目立たないリーダー

中竹さんは、1973年、福岡県中間市の生まれ。1つ上の兄、9つ下の弟の3人兄弟。鉄工所経営の父は絶対専制君主だった。元番長で、すごい威圧感、存在感だった。ただし、ああしろこうしろと親の思い通りにはしなかった。兄がやっていたのを見て、ラグビーを始めたが、それにしても、とやかく言われなかった。ラグビーの試合すら見に来なかった。目立たない少年だった。なのに、学級委員に任された。地域のラグビーチームのリーダーにもなった。福岡のラグビー名門校の東筑高校でも、ラグビー漬けの日々を送った。1浪して早稲田大学へ進んだが、チーム一足が遅く、3年間レギュラーになれなかった。だが、チームの潤滑油的存在でもあり、理不尽なことは、監督やコーチに物申した。こうした姿勢が買われたのか、チームメイトから主将に推された。3年までレギュラー経験のない初の主将だった。

いまや日本ラグビー界のリーダー

2019年、日本で開催予定のワールドカップ

プに向けて指導者養成が急務だが、中竹さんは、いわばコーチを育てるコーチという役回りを買っている。

日本代表は1987年の第1回大会から途切れなく出場を続けているが、本大会では、ジンバブエに勝ったのが唯一の勝ち星だ。2007年のフランス大会ではオーストラリア代表91-3という大差で負けており、世界のトップクラスの国々とはまだ大きな開きがある。

2019年に向けて、コーチたちに、課題を与えて、考えさせるようにしている。変化に即座に対応しながら、選手のことか伸びた！と成果で語れるコーチを育てるべく、東奔西走しながら全力投球の日々だ。いまや日本ラグビーの未来は、中竹さんの双肩にかかっている。

中竹さんは、「判断」と「決断」は違うと考えている。「判断」には、良し悪しがあるが、決断にはない。あるのは、やるか、やらないかだけ。未来は未定だから「判断」出来ない。だが、思い切って未来に向かって「決断」しよう！静かな口調の中に、内に燃えたくるマグマを感じた。2019年が待ち遠しい。

ラジオが好き!

村上信夫

好評発売中



フルート奏者として活躍中。俳画家。絵画を幼少より日展画家の(故)川村行雄氏に師事。俳画を華道彩生会家元(故)村松一平氏に師事。俳画の描法をもとに、少女、猫等を独自のやさしいタッチで描いている。個展多数。

俳画教室開講中
ところ 常滑屋
とき 月一回 第二・第四金曜日
午後一時～三時
会費 一回 二、二五〇円(三ヶ月分前納制)
問合せ ☎〇五六九(三五)〇四七〇

大人でも上達する!
何か始めたいと思ってる貴女。数年後、素敵にフルートを奏でる姿がそこにあります。楽しく個人レッスン致します。

フルート教室 入会受付中!!

講師 **イネ・セイミ**
(フルート奏者 指導歴30年)
1レッスン・時間5,000円(チャイムタイム付)
申込み 0569-89-7127
お問合せ scimline@oasis.ocn.ne.jp

慈愛の人・良寛

(72)

杉本武之

生活スケッチ

「泥棒に入られる」

良寛さんは、生涯、本当に貧しい暮らしをしていました。生きて行く最低限度の物しか持っていませんでした。毎日、翌日の食べ物を買って托鉢に出かけました。あまり買えない時もありました。そういう時は、空腹をじつと我慢しました。

文章は、ほとんど暗唱できるくらい記憶していました。ですから、現物の書籍や経典を常に手元に置いておく必要はそんなになかったことも事実です。

衣食住、すべてにわたって不如意な状態で、良寛さんは心静かに生き続けたのです。そんな良寛さんの庵にも、泥棒が入ったことがありました。泥棒というものは、一旦他人の家の中に入った以上は、何かを盗んで行きたいものです。物持ちではない良寛さんの庵に入った泥棒は、いったいどんな物を盗んだのでしょうか。



「おや、泥棒だな…」

良寛さんが55歳の時でした。その頃、良寛さんは、国上山の中腹の五合庵に住んでいました。その小さな庵から、毎日、杖をついて山道を下り、あちこちの村里に托鉢に出かけていました。ある秋の夕方のことです。

良寛さんは、部屋の隅々を点検しました。部屋の隅に片付けてあった襪と円形の座布団が見当たりませんでした。襪板というのは、坐禅する時に使う長さ50センチほどの板で、膝に横たえて

良寛さんは、この時の経験をもとにして、次のような「賊に逢ふ」と題する漢詩を作っています。

「襪板と蒲団と把り持ち去る、賊の草堂を打すること誰か敢えて禁せん。終宵孤坐す幽窓の下、疎雨蕭蕭たり苦竹の林。」(大意) 私が托鉢に行っている間に、盗っ人が私の庵に押し入って、襪板と円形の座布団などを持ち去って行きました。庵に

良寛さんは、昼間の托鉢の疲れからか、ぐっすり寝込んでいました。部屋の片隅から何か変な物音が聞こえてきて、良寛さんは目を覚ました。明るい月の光が窓から差し込んでいます。よく見ると、部屋の隅に一人の男がいます。こんな時間に住人の良寛さんに断りもしないで部屋の隅に居るのですから、この男の人は泥棒にちがいないと見えました。

良寛さんは立ち上がって、窓から外を見ました。月の明るい夜でした。泥棒が布団を重そうに抱えて、神社の階段を降りて行くのがはっきりと見えました。がらんとした部屋を見回し、困憊裏のそばに座ると、窓の月を見ながら、良寛さんは俳句を作りました。

「盗人に取り残されし窓の月」

この夜の盗難について、解良米重さんは『良寛禅師奇話』の中で次のように書きました。ちよつと信じられない話ですが、良寛さんらしいエピソードです。



＜杉本武之プロフィール＞
1939年 碧南市に生まれる。
京都大学文学部卒業。翻訳業を経て、小学校教師になるために愛知教育大学に入学。25年間、西尾市の小中学校に勤務。定年退職後、名古屋大学教育学部大学院で学ぶ。
＜趣味＞読書と競馬

この指とまれ (183) 氏原朝信

「『この指とまれ』と学級通信・文集『スクラム』(2) ニュース(題材) 探して大変苦労をしたようです。中でも学級のニュースとして継続的に取り上げて取材したのが、メダカ捕りから飼育の観察記録でした。」

「4月11日にとつてきたメダカが4月15日にとつてきたメダカより大きくなりました。」

「メダカが大きくなると、赤ちゃんのメダカが二、三匹き、泳いでいました。もつとたくさんかえるといね。」(5月14日付)

「4月11日に七本松からとつてきたメダカが卵を産みそれが今では、三・四〇びきほどもかえり、ほうふう

のように体をくねらせながら泳いでいます。早くかえつたメダカは、小さいながらも大人らしくなっています。これから全部のメダカが元気に大きくなっていくのを見るのが楽しみです。」

「5月15日に行われるはずだった陸上競技大会が雨のため延期になりました。その代わり17日に行いました。総合三位までには、入れなかつたけど、みんな、一生懸命やっつて、一生懸命応援したし、練習の時よりいい記録ができました。」

「5月21日付) や委員会があるのでどれに入ろうかと迷う子もたくさんいました。みんな、自分のやりたいと思うものに入りました。」(5月7日付)

おとうさんの手

かたくて大きなおとうさんの手。たばこのにおいがしみこんでいる手。おとうさんの手をまくらにしてねるとおとうさんだけのおいがかたから胸の中にしみこんでくる。私のおとうさんの手。おとうさんの手。元氣なその手で私たちを見守ってください。

「5月21日付) や委員会があるのでどれに入ろうかと迷う子もたくさんいました。みんな、自分のやりたいと思うものに入りました。」(5月7日付)

料理研究家 長澤晶子のSPEED★COOKING!

ホクホクコロック

父の日に家族でつくろ!!

新じゃがの季節になりました。サクサクの衣のコロックをつくろ!!

材料(4人分)

①じゃがいも…500g
土を洗い落とし、お血に並べてラップし電子レンジでチン!
竹串が通るくらい柔らかくする。
皮をむいて、マッシュナーなどでつぶす。

具

②油 ……大さじ1
③玉ねぎ ……1/2個→(みじん切り)
④豚ひき肉…150g
⑤しょう油…大さじ2
⑥砂糖 ……大さじ2
⑦生クリーム or 牛乳…50cc

⑧小麦粉 ……適宜
⑨溶き卵 ……適宜
⑩パン粉 ……適宜
⑪サラダ油…適宜

作り方

- ①の準備をしておく。
- フライパンに②をひいて、③④を加え、炒める。火が通ったら⑤⑥を加え、汁気がなくなるまで煮つめる。
- 大きめのボールに①を入れ⑦⑧を加え、混ぜ合わせる。
- ③を好みの形にし、⑨をまんべんなくつけて、⑩にくぐらせ⑪をしかりつける。(ここで形を整える。ハートの形もかわいいですよ)
- 180℃の油で(菜ばしを布巾で水気をとり、油に菜ばしを入れるとシュワシュワと泡が出るくらい)3個くらい、ゆとりをもって揚げる。

ポイント

ゆっくり、滑らすように油に入れ、下の面がきつや色になったらそつと上下を返す。(コロックの衣を破らないように注意してね。)

常滑市民文化会

八木美知依 作曲研究会演奏会
四月(土)午後六時~同八時四十分
大知無料(要整理券) 問合せ:八木美知依 作曲研究会 ☎0569-3415127

夏期講習会 二十一日(火)午後二時~同四時 入場関係者 問合せ:食品衛生協会知多支部 ☎0562-1326667

常滑市文化協会 議員総会並びに表彰式 四月(土)午前十時~正午 場所:第2展示室 問合せ:常滑市文化協会 ☎0569-3512920

市老連趣味の作品展 十日(金)、十一日(土)午後三時定 場所:ホールロビー 第12展示室 あなたのギャラリー 問合せ:常滑市社会福祉協議会 ☎0569-344018

伝統文化 ことばのばな教室 十八日(土)午前十時~正午 場所:第1展示室 問合せ:常滑地区伝統文化ことばのばな教室 ☎0562-3321198(伊藤)

常滑市立図書館
常滑会館 八日(水)

七月(日)八月(水)各水全二回 午前十時~午後二時 場所:中央公民館
対象:小学四年~六年生 受講料:無料 材料費:五百円 申込期限:十四日(火) 問合せ:生涯学習課 ☎0569-35290

鬼崎公民館
子ども文化教室Ⅱ 英会話 七月(日)八月(水) 対象:小学三~四年生 受講料:無料 材料費:五百円 申込期限:十四日(火) 問合せ:生涯学習課 ☎0569-35290

青海公民館
子ども文化教室Ⅱ スズンドラのフレット作り 八月(日)午前十時~午後二時 場所:青海公民館 対象:小学四年~六年生 定員:二十名程度 受講料:無料 材料費:五百円 申込期限:十四日(火) 問合せ:生涯学習課 ☎0569-35290

子ども文化教室Ⅱ パパストン(まが玉作り) 八月(日)午前十時~午後二時 場所:青海公民館 対象:小学四~六年生 定員:二十名程度 受講料:無料 材料費:五百円 申込期限:十四日(火) 問合せ:生涯学習課 ☎0569-35290

常滑市立図書館
子ども文化教室Ⅱ 料理 七月(日)八月(水) 場所:青海公民館 講師:野口正義さん

誠意をこめて安心のお手伝い
年中無休・24時間体制

(有)大阪屋葬祭

常滑ホール / 鬼崎ホール / 阿久比ホール

TEL<0569>35-4949 (代表)
FAX 35-4911

知多の新鮮たまご
発酵ケイフン

(有)知多エッグ

知多郡武豊二ツ峯380
TEL0569-73-6341

新シリーズ ヒューマンライフ

『新・現代家庭考』就職

—自分ドラマつくり— (3) 岡田 清治

裕美は娘の舞の話になると、口が重たくなる。外国と言え、裕美の妹の恭子が大学で宇宙工学を学び、アメリカ航空宇宙局(NASA)の研究施設で働いていると聞いたことがあった。

「妹さんがアメリカにおられるのではないですか」

「ええ」

「そうだったら、妹さんに相談されるのがいいのでは…」

「ええ、遊びや観光なら別ですが、仕事の話になると、世界が違い過ぎて相談相手になってもええなと思います」

「でも、妹さんですから、姪のために一肌脱いでもらえないのでは」

「もう、何年も交流していませんから…」

真三は裕美が弟の健太郎と結婚する時に、妹の恭子が強く反対していた話を思い出した。

「なぜ、反対しているの」

当時、さりげなく聞いたが、裕美は答えなかった。

「別にたいしたことではないよ。気にしないでくれ」

弟の健太郎が中に入って話を遮断したことがあった。

だから裕美が妹と親密でないことはそこはかとなく理解できた。

「舞さんの外国行きを許されないなら、国内で就職先を探さなければなりませんね」

「はい」

「舞さんが、何をしたいかが大事でしょうね」

「……」

真三自身も若い時に何をしたいかという考えを持っていなかった。苦労人の母親が「真三は大工仕事が好きだから、大工にでもなつたらいいがな」と真顔で話した。

息子三人には残せる財産もないので、せめて教育だけでもつけさせようと考えていた父親は驚いた。

「勉強が嫌いなのに、無理して上の学校へ行ったら、かえって不幸になります」

「俺、大工さんになんかに、ならない」

中学生の真三は反発した。

若い時から一生かけてする仕事は決まらないものだ。商売人の子どもなら小さい頃から「後継ぎのこと」を教えるが、サラリーマン家庭では高等教育を身につけさせることしか考えないのが普通である。

どうしても有名校、大企業というのが、団塊の世代と言われる真三や弟以後の時代は、定番コースだった。もちろん、そのコースに入れるのは一部の子どもで、多くは中卒、せいぜい高卒で就職していた。

真三の小学校の同級生で当時、真三の家に来てよく遊んだ佐川勇という友だちがいた。

ある年の小学校の同窓会で半世紀ぶりに再会した。

T市の旧国鉄(現JR)の廃線跡と照明のないトンネル内約五キロを歩くのである。真三も廃線ハイクに興味をもったので弁当を持って出かけた。集まったのは真三と佐川、それに彼の友人の中村雄太という男三人だけだった。

散策路は溪流に沿って奇岩、巨岩の気持がいい風景を楽しみながら歩いた。

大きな借金を抱えていた。やがて倒産、大学進学をあきらめて市役所に就職した。同期で高卒止まりは彼だけだった。真三の実家で遊んだ仲だった佐川は「男だった。先妻の長男が家業の酒屋を継ぎ、父親の死去で後妻である彼の母親とともに家を出て、地元中学校から夜間の工業高校へ進んだ。昼間は大手S電機の下請けで流れ作業のねじ締めの仕事をしたが、「これは人間のすることではない」と思った。夜間の工業高校を卒業して就職しようとしたら「大手の民



南極・グラハムランド(著者撮影)

※この物語に対する読者の方々のコメント、体験談を左記のFAXかメールでお寄せください。今回は「就職」についてです。物語が進行する中で織り込むことを試み、一緒に考えさせて頂きます。
FAX: 0569-34-7971
メール: takamitsu@akai-shinbun.net



著者: 岡田清治(おかだ・せいじ)

一九四二年生まれ ジャーナリスト(編集プロダクション・NET 108代表) 著書に『心の遺言』『あなたは社員の全能力を引き出せますか』『リヨンで見た虹』など多数

間企業は中卒扱いであった」ので、高卒扱いの市役所に入った。働きながら夜間大学にも通ったが、大卒扱いにはならず定年まで勤めた。

二人は期せずしてそれぞれ違う市役所にいたが、配属された部署が「K部」だった。それを聞いた夜間卒の佐川は「苦勞しただろうな」と、同情を交えながら即座に答えた。

この部署は長続きせず、途中退職者が多く、ノイローゼになる職員も多いことを知っていたからだ。市会議員が人事や仕事に口出すことは日常茶飯事で、「悪い」と思っても逆らうことはできず、生活のために歯を食いしばって来た中川は話す議員にカネを渡せば異動も可能だったが、それもせずがまんすることで解決した。その市役所では後年、某議員の横暴が原因で不正が明るみに出て、逮捕、担当所長も懲戒免職になっている。

「いつかは、表面化する」と、中川は秘かに感じていた。

今回のハイキングで同時代を同じ地域で生き抜いてきただけに、共通の話題も多く、懐かしさが込み上げてきた。二人の友は定年後、市の主催するシニアの勉強会で福祉コース、歴史コースと分かれて学び、それぞれのコースを卒業した者が同窓会をつくって小旅行をしているのが楽しみだと話す。また二人は貸農園を借りての野菜づくりも共通していた。

真三は地元の中学校から県立高校、大学へと進めた当時の中学校卒の数人の大卒の一人だった。兄弟三人とも地元中学校から大学まで進んだので、これまであまり意識をしなかったがこうして半世紀の歳月が経って会うと、それぞれ人生を率直に語り、改めて彼らの苦勞を知る有意義なハイキングとなった。

「戦後の食い物がなかった」ことだけは、共通していた。

真三は我に返り、裕美の顔を見た。

「我々の時代と今はすべてにわたって違います。当時はなにが何でも就職しなければならぬという思いが強かったですね」

「今の子はモノが豊富な時代に育ち、満たされ過ぎているのかも知れませんね」

「そうです。だからしんどい、きつい仕事は避けるのです」

「看護師や介護士なら就職も比較的しやすいのでしょうか、若い女性は敬遠しています」

「日本の場合、男女の雇用が均等になったとは、現実の社会では言えません。ある種の差別は根深く残っています」

「それは感じます」

「とくに大手の企業がひどいです」

「これから伸びる会社や分野はどういうところですか」

「難しいです。今、元気な企業が将来も元気かと言うと、その保証はできません」

「とくに通信やメディアの業界は伸びているように見えますが…」

「確かに恵まれています、それだけに競争も激しく、またグローバル時代になって企業の統廃合が激しくなっています。やはり、選択が難しいでしょうね」

「会社選びが大変です」

「たとえ希望した企業に入らず、中小企業に入っても、その職場で仕事を覚えながら腕を磨くことはいくらでもできます。かえって幅広い仕事ができると思いませんか」

中小企業で専門的なことを学びたいと思えば、夜間学校で勉強することも不可能ではないし、奨励している企業も少なくない。中小企業は人を育てながら戦力強化を図っているからである。

ローバル化の波に乗ろうとしている。英会話は常識だと、英会話教室に通う、あるいは海外でホームステイした経験を持つ学生も多いはずだ。今の時代、その程度ではそう評価されない。

十数年前と大きく変わってきた一つが、就職戦線に留学生が参入してきたことだ。それまでは就職難が続いたが、今は引つ張りだことである。中国吉林省は朝鮮と接しており、朝鮮民族が多く暮らす。

その一人つ子を日本に送り込む親がいる。日本人と結婚してもいいから、日本で自立しろと、高校を出ると日本へ送り出した。日本語ができないものだから三K職場で働きながら日本語を学び、うどん屋、居酒屋と職場を変え私大を卒業ビジネスホテルの店長にまでなっている。

彼は朝鮮語、中国語、英語、そして日本語の四ヶ国語を自由に話す。日本人妻の間に子どももいる。日本人学生が太刀打ちできない。これから東アジアとの交流が活発になれば、彼のような実力を求める企業は増えるに違いない。企業はより高い待遇で処するだろうし、そうでなければ自ら求めて転職も可能となる。

就職後は偏賃や有名ブランド校というだけでほとんど役に立たない。それより学力や実力がものをいうのである。

真三はチェーン店の世界で見たことについて話した。

就職率が低い理由のひとつにミスマッチを指摘する人がいる。中小企業の経営者も「学生が来てくれない」と嘆く。学生はリクナビやマイナビといった就職サイトに頼り切っている。そこには中小企業の情報がないと嘆く声も聞かれる。こういうサイトへ掲載するにはコストがかかり過ぎて情報発信できないというのが、企業側の言い分である。

中小企業が一社で求人活動をしようと思っても若干名(大方の場合、一二名)の採用だから大学の就職窓口でも冷やかな待遇になっている。それなら中小企業が一緒に募集できるようにすれば、まとまった採用人数になる。そのために、行政や経済団体が指導することも大事で、現にそういうことを試みて成功しているところもある。

経産省、中小企業庁やそれらの各県の出先には有力中小企業のデータベースもあるはず。これらの情報がハローワークやインターネットで簡単に見られるようにするなど、ミスマッチの解決策はいくらでも考えられる。

中途退職した若者からは、パワーハラスメントなど職場の嫌がらせ、不法残業を強いるなどの理由が聞こえてくる。

経営者一族のために安価に働かせているイメージが定着すれば、学生は敬遠する。やはり魅力ある企業づくりに精進しなければならぬ。

「ただ、若者が中小企業に目を向けないのは、本人だけでなく親の意思が強く働いているように思います」

真三は口頭、感じていることを裕美に話した。

「そうかも知れません」

「ボクはかねてから親業、つまり親のありようを教えないとどうしようもないところまで、日本はきていると思っています」

「……」

学生の就職意識よりも、親の意識改革が求められる。親は「安定して待遇のいいところは、大企業である」と、信じている。それはある意味で間違っていないが、それで幸せがつかめるかどうかは別問題である。

仮に大企業に入っても職場での競争は激しく、責任も大きい。大事なことは子どもが生きがい、やりがいを感じながらやっていると、いけるかどうかであることを忘れないことである。(続く)

連載●ほりお教授の紀行文学シリーズ

ロマンチック沖繩旅物語

第五回

いま、ひめゆりの海で

堀尾 幸平



昭和二〇年、第二次世界大戦で民間人にも多くの犠牲者を出した沖縄は、今もいたる所に過酷、非情な戦争の傷跡を残し、戦跡や慰霊碑の前には参拝者が後を絶たない。

ぼくは、ドライブの途中で助けた老女ひめゆり学徒の同級生という九二歳の石丸ハルさんと、その悲劇の現場・ひめゆりの塔に来ていた。

沖縄戦末期、戦局悪化で駆り出された沖縄県立第一高女と沖縄女子師範の女子学生たちで結成された「ひめゆり学徒隊」が、玉砕で無残な死に追いやられた場所である。

ひめゆり平和記念資料館は、平日の午後であったが、かなりの人でにぎわっていた。

ぼくは、ハルさんができるだけ展示物のすべてを観られるように、病気でひどく衰弱した彼女を車椅子ではなく、直接おんぶしてゆつくりとていねいに歩くことにつとめた。

先ほどからハルさんの失禁で、ぼくの背中は熱く冷たく濡れていたが、そんなことには、かまっていられなかった。

その、ハルさんが、「ひめゆり」の中心舞台となった陸軍病院第三外科壕のジオラマの前に来ると、突然、体をよじって、ぼくの背中から飛び降りた。そして、見学中の十数人を前に

大きな声で演説をはじめたのである。痩せた小さな身体からほとぼしり出る言葉、必死の形相に、まわりの人たちは驚いた。ハルさんのどこから、こんな激しい力が出てくるのか、不思議な思いで、ぼくもしばらくぼう然と聞きほれた。

「このひめゆりの女子学徒たちは、私の同級生、同朋、つまり友だちであります。あの頃、米兵に追いつめられて、壕を逃げる時、歩けない兵隊さんや看護学徒も一緒に連れて行ってほしい、みんなで手分けして運ぶから、と強く頼んだのです。でも、偉い兵隊さんに『この人たちは後でトラックで運ぶから』と言われ、その人たちを残して動ける者だけで逃げて行きました」

そこで言葉を区切ると、ハルさんは、たまりかね急に思いついたように全身を震わせて叫んだ。「でも、偉い人の言葉は嘘でした。残された人たちは、そのすぐ後、青酸カリを混ぜた粉ミルクを飲まされ、

全員殺されてしまったので、一同はぼう然として立ち尽くした。館内は、シーンと静まり、あちらこちらで嗚咽が洩れた。

沖繩戦には、島民の数を上回る五十四万人もの米兵が投入され、米軍の鑑砲射撃は六〇万発、大砲の砲弾は二〇〇万発、沖繩の地形が変容するほどの砲撃と死闘が繰り広げられた。

「死ぬのはイヤだ！こわい、こわいよう！」泣き叫びながら必死に逃げる子どもを母親がつかまえて、断崖から突き落とし、一家全員で心中を遂げた恐怖の修羅場。

「さあ、みんな一緒にいさぎよく名譽の玉砕をするのです！」教員と女子学徒たちみんなが抱き合って、手榴弾を爆破させ、自決する壮絶な最期。「天皇陛下バンザイ！」絶叫とともに吹き飛ばす少女たちの身体。

☆壕を包囲したアメリカ兵がマイクで、何度も何度もくり返して呼びかける。「日本ノミナサン。武器ヲステテ、今スグ、壕カラ出テ来ナサイ。私タチハ、決シテ攻撃シマセン。傷ノ手当ヲシテアゲマス。スグ出テ来ナサイ」

米兵の呼びかけに、身を潜めていた三、四人の兵士が決意を固めた。「ハルさん！」

「俺は行くぞ。生きられるなら捕虜でも何でもいい、俺は降参するんだ！」

銃を捨て両手をあげて壕を出る兵士たち。「行くな！騙されるな！」「裏切りは許さん！」そう言いつつ、味方の兵士が発砲した銃弾を浴びて、振り返る間もなく倒れる兵士。

☆狭い壕の中は、瀕死の重傷者や腐乱した死体が折り重なって通路を塞ぎ、歩くこともできない。死臭と血と汗と糞尿の悪臭の中を、杖を持って死体避けながら進む。まっ暗な中に、断末魔の叫びが響く地獄よりももっと恐ろしい壕の中。

無断で病院を抜け出てしまわれましてね。ご協力願います」医師らしい年輩の男性が、ぼくの耳元でささやくように説明した。そしてハルさんが、進行中の認知症であることを手短かにつけ加えた。看護士らしい女性がハルさんの肩を抱いた。「さあ、ハルさん、帰りましょうね」「それにハルさん、言っておきますが、『余命三か月』は、ハルさんの思いすごしですよ。そんなことは病院では絶対に言っていないですよ」「ハルさん、院長先生のおっしゃることを信じて。病院を信じて、帰ってください」

凄まじい証言に、誰もが息をのんだ。

その時、学芸員らしい人が走りよってきて「許可なく、部外者の方の説明はご遠慮いただきたい」と言い、ハルさんとぼくはすぐに外へ追いつめられてしまった。大勢の人たちが、涙を浮かべて名残惜しそうな不満な表情で見送った。

ぼくは、ハルさんを抱きかかえて外に出ると、激しく震えている彼女をとりあえずベンチに座らせた。

なかなか収まりそうにもないハルさんの興奮を、それでも、いまここで収めなければならぬ。ぼくは、ハルさんの肩をしっかりと抱いた。

その時、サイレンを鳴らして救急車が構内に入ってきた。なぜかハルさんは「あつ！」と声をもらし、ベンチのかけに身を隠した。

「ハルさん！」

「あれですとも。このひめゆりの海ですよ。わかりますよ。ハルさん。では、ほりお先生にお願いしましょうか」

「ありがとうございます。私、うれ

「みんなは顔を見合わせた。それから、ぼくは、後続の救急車に見守られながら、ゆつくりとシボレーコルベットをひめゆりの坂を少し下りた荒崎という海辺に停めた。

荒崎海岸は、沖繩本島最南端で追いつめられた日本兵と住民が多数死んだ場所である。

その浜に立つと、ハルさんは、波打ち際に向かって、力いっぱい走り出た。その走り方は、速く、軽く、まるで、かつての女学生であった。まさに奇跡であった。ぼくは、目を見張った。

ぼくも、ハルさんの後を追って、白くかわいた砂浜に走り出した。眼前に広がるひめゆりの海は、どこまでも明るく、キラキラと光ってまぶしかった。

ハルさんが笑顔で大きく手招きしている。「ねえ、先生、早く来て！一緒に泳ぎましょうよ」

スカートの裾をひるがえし、波打ち際ではしゃぐハルさんは、十代の明るい、純真無垢なひめゆりの少女であった。

補注

ここに、本原稿の印刷完了後に判明した新事実を、将来の参考資料として補注しておく。その後の筆者の調査で石丸ハルさんは、実際には、ひめゆり学徒とは関係がないことが判明した。なお、正式な年齢も大正十三年生まれの八七歳であった。

(私の取材ノート)の記録の一部が、ハルさんの認知症による幻覚症状からの誇大妄想の結果であったと推定される。あるいは以前に観た映画「ひめゆりの塔」の影響かもしれない。更に本人が記憶していた熊本県の親戚も今は没落して、消息は不明である。したがって、ハルさんに身寄りはなく、現在、島根県の老人施設M介護厚生院で生活していることも付記しておく。

二〇一、五、五。補記

《筆者紹介》

ほりお・こうへい。作家、「日本学術出版」代表。名古屋大学研究室修了。元愛知淑徳大学文学部教授。著書多数。現住所、名古屋市南区元桜田町四一五五。

